

# 稱讃 二六四号

二〇二四年十二月一日発行

ふか によらい こうあい し  
深く如来の矜哀を知りて、まこと  
しきよう おんこう あお きようき  
に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよい  
いた しこう おも  
よ至り、至孝いよいよ重し。これ  
しんしゅう せん しょう  
によりて、真宗の詮を鈔し、  
じようど しょう ひろ ぶつとん ふか  
浄土の要を撫ふ。ただ仏恩の深  
きことを念うて、人倫の嘲りを  
は じんりん あざけ  
恥ぢず。もしこの書を見聞せんも  
しんじゆん いん ぎほう えん  
の、信順を因とし、疑謗を縁と  
しんぎよう がんりき あらわ みようか  
して、信樂を願力に彰し、妙果  
あんじよう あらわ  
を安養に顕さんと。

『教行信証』後序より

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

今年、浄土真宗の立教開宗八〇〇年です。

親鸞聖人五二歳(一二八四年)の時、『教行信証』を著作に取りかかったことを「立教開宗」と位置づけしております。

二〇二四年度 稱讃寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

『教行信証』の総序の最後に、「真宗の教行証を敬信して、ことに如来の恩徳の深きことを知んぬ。こをもつて聞くとくを慶び、獲るところを嘆ずるなり」と締め括っております。

「正信念仏偈」の前文には、「大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閱して、仏恩の深遠なるを信知して、「正信念仏偈」を作りていはく、…」と述べられておられます。

また『浄土文類聚鈔』序では、「如来の教勅を奉持して、恩を報じ徳を謝せよ。ここに片州の愚禿、印度・西蕃の論説に帰し、華漢・日域の師釈を仰いで真宗の教行証を敬信す。ことに知んぬ、仏恩窮尽しがたければ、あきらかに浄土門類聚を用ゐるなり。」と冒頭に書かれ、「聞くとくを嘆じ、獲るところを慶びて、真言を採集し、師釈を鈔出して、もつぱら無上尊を念じて、ことに広大の恩を報ず。」そして、「念仏正信偈」の前文には「恩を知りて徳を報ず、理よろしくまづ啓すべし。…仏恩の深重なることを信知して、「念仏正信偈」を作りていはく、…」と述べられておられます。

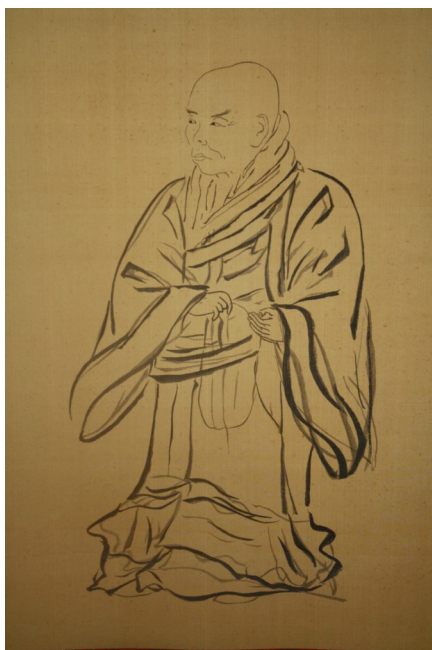
「報恩の念仏」と聞き習っております。「恩徳讃」では、「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても 報ずべし 師主知識の恩徳も 骨を砕きても 謝すべし」と謳って参っております。

蓮如上人は、「称名報恩」と申されました。



# 稱讃寺

## 報恩講のご案内



日時 十二月二十二日(日)

日程

- 一二:三〇 お斎
- 一三:〇〇 法要
- 一三:五〇 休憩
- 一四:〇〇 法話(住職予定)
- 一五:〇〇 茶話会
- 一六:〇〇 終了

思うに、「称名念仏」には二つの意味があり、第十七願の「諸仏称名の願」と「お念仏申す」と言うことであります。

「諸仏称名の願」のお念仏は、阿弥陀さまの本願が成就したこと、その恩徳が報われた相としてのお念仏という意味での「報恩の念仏」と言われているのではないのでしょうか。

また私が「お念仏申す」と言うのは、阿弥陀さまの恩徳が深く広く重いことを、お釈迦様から七高僧(これは親鸞聖人の場合)、私たちにおいては、親鸞聖人の教えから知らされ、申すお念仏を「報恩の念仏」と言うのではないのでしょうか。

時に私たちは、「称名」というと、私の計らいになつてしまいます。蓮如上人は極力計らいを捨てる意味でも「称名報恩」と仰つたのではないのでしょうか。

瓜生津隆雄師は『歎異抄講話』第二十講報恩の念仏(その二)で次のように仰つておられます。

### 四 自力念仏の破綻

「自力の成じがたき」旨を知らさんとして、本文の上には「われと罪を消して往生せんと励む念仏であれば、一生のあいだ、思いとすること、みな、煩惱妄念のほかない故、念々に滅罪のため、いのちつきる最後刹那まで、念仏を退転してはならないことになる。しかし業報は人々によりて差別があることである。いかなる病氣を受くやもはかられぬ。その病苦にせめられて念仏申さずして終る人もあろう。その間に造つた罪は消えないことになる。罪の消えない人は往生はできぬ。まことに滅罪念仏、臨終正念を期する人々はかかる破綻を受けねばならぬ」という旨を述べています。

思うに、この著者の意は自力念仏の破綻を示して、臨終正念の得不得を論ぜない他力の旨を明らかにせんとせられるもののようにあります。そこで次に、自力念仏に對比して他力念仏の旨を左のごとく言われています。

「摂取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる不思議ありて、罪業ををかし、念仏せずして終ることも、速やかに往生を遂ぐべし」と。

まことに、自力と他力とを對比して、その差別の鮮明なるものがあります。ここに「摂取不捨の願」とは「たのませてたすくる弥陀の本願」のことであります。

されば如来の仏智にすべてを打ちまかせたとき摂取不捨の利益にあずけしめ給うのであります。

だから、他力念仏の心は、臨終の近づくにつれて「いよいよ弥陀をたのみ、ご恩を報じ奉る」ことのはかはありません。

前講にも述べたとおり、まことに本願の旨は、信心を正因とし、称名を報恩といたくほかはありません。覚如上人が、親鸞聖人の教えを「平生業成」と言い、更に浄土真宗の教旨は「信心正因・称名報恩」であると、余他の浄土宗に対して示された、その基づくところは、まったくこの『歎異抄』の第十四章にあると申さねばなりません。かくのごとく、この第十四章は、浄土真宗の教旨の確立の上において大切な一章であります。

私たちにおいては、「親鸞聖人報恩講」であります。阿弥陀さまの深重なる恩徳を知らしてくださっている親鸞聖人の恩徳を味わい、お念仏申して参りたいと思います。



## 特集 金子大榮師のご領解 ㊦

### 『親鸞の人生観』

#### 教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

#### 三 涅槃の智慧

本文 たとひわれ仏をえたらんに、十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類、わが名字をききて、菩薩の無生法忍、もろもろの深総持をえずば、正覺をとらじ、と。已上

#### 口語訳

われ仏とならば、十方の量りなき世界の群生、わが名を聞かば、聖者としての涅槃を思念する忍(ちえ)と、もろもろの深き総持の慧(さとしき)とを得せしめようしからずば覺の身とはなるまい。

#### 一

身心柔軟ならば無生法忍があらわれる。涅槃の智慧によりて、いよいよ身心は柔軟となる。ここに触光柔軟について聞名得忍を願われた仏意があるそれで親鸞もこの二願を別のものとせず、相待ちて真仏弟子の徳を顕わすものと領解せられた。

されど真仏弟子の名の意義に相応するものは、とくに涅槃の智慧を得たということであろう。已に「必ず大涅槃を超証すべきが故に真の仏弟子といふ」のであった。したがって無生法忍ということも信心の智慧に他ならぬのであろう。その信心は阿彌陀の名を聞くことによりて自身を仏弟子として見いだすようこびが感ぜられてあるのである。ここにわれらはまずもって無生法忍を得ること

は仏の名字を聞くことであることを明らかにせねばならない。仏の名字とはすなわち阿彌陀仏という名号である。その仏の名を聞くことが信心の智慧となるのである。その仏の名を聞くことは聖教の説にもより、善き人の仰せにもよることであろう。それはきわめて手近にあるものといつてよいのである。されどそれがいかに重大なることであるかは、十方の諸仏みな阿彌陀の名を称揚し讃嘆せらるゝと経説されてあることと思ひ知らねばならない。阿彌陀仏という名である。名はすなわち声であり称である。その名声を聞いて称念する、それが人間の生活に大いなる功德をあたうるのである。阿彌陀仏の名の響きがわれらを涅槃へと導くのである。

しかし「名」といえば必ずそれに相応する「実」がなくてはならぬのであろう。その実こそ光明の他ないのである。したがって身心を柔軟ならしめる光明こそは阿彌陀仏の名に相当する実というべきものである。その光明の他に仏身といつても実体的ものがあるのではない。それで光明無量のゆえに阿彌陀と名づくことと経説されてあるのである。しかしその光明の実も仏名を称念することにおいてのみ感知せられるのである。称名の他に光明を仰ぎみる法はない。ここに阿彌陀という名の持つ力がある。その名がわれらを招喚(よびきま)して自己を知らしめ、光明の摂取を感知せしめるのである。

こうして名は名(よ)ぶものである。阿彌陀の名が暗黒世裡にあるものを光明界中へと呼ぶのである愛憎に動乱するものを大涅槃界へと招喚するのである。その声を聞くとは、その響きを身心に感受することのほかにない。したがって仏の名を聞くものは無生法忍を得ることも自然のことであろう。しかしてこの無生法忍はすなわち身心を柔軟ならしめるものである。その智慧において無生法忍である

ことは、その感情において身心柔軟なることである。しかれば、光明に照らされて、名号を聞くということも戴けることであろう。

教法は光を体とすとも説かれてある。諸仏のすめによりて阿彌陀の名を聞く。そこに真仏弟子のようこびがあるのである。

#### 二

ここで無生法忍という語の意義をあきらかにしておかねばならない。諸法(ものみな)の実相(あるがまま)は無生無滅である。それは「如」より「来」れるものが真実の智慧である。その智慧を如来といふその境地を涅槃という。それで「如来すなわち涅槃なり」ともいわれている。したがって涅槃は無生無滅の法である。その法に安忍する力を持つことにおいて智慧は忍といわれる。動乱の生活に慣れたるものは涅槃の法あることを知りても、それに耐えることができない。その耐える力、すなわち忍を仏名が与うるのである。

しかれば涅槃は無生であり、また無滅である。しかるに何故にその無滅をあらわさずに無生を要とせられたのであろうか。「諸行(もろみな)は無常であり、それ生滅の法」であるにちがいはない。とすれば永遠に滅びないものこそ願わしいものではないであらうか。しかるに仏教では「生滅を滅し已りて寂滅を樂とす」というのである。それは永遠に無生なるものを願うているのである。そしてそこに近づき得るものがある。

思ふに道理としては、涅槃は無滅というも無生というも同じことであらう。已に涅槃は不死甘露の法とも説かれているのである。それにも拘わらず特に無生の法として強調されてあることは生滅の束縛を脱れることのできないのが凡夫の苦であるか

らであろう。愛憎の執着を離れしめるものは不滅の真実というよりは不生の涅槃という方が適切である。その寂滅はいうまでもなく一度は滅しても、また生ずるというようなものではない。生滅ともに滅して生滅に執らえられない永遠に不生なるものである。永遠に不滅なる真実も、この永遠不生の境地に達せるものにあらわれるものではないであろうか。わたしはこれ已上に無生法という語のもつ感じを話すことができない。しかし幾らかでも、その感じをもたないならば、仏弟子とはいえないのではないであろうか。

このことはさらに智慧を忍の名で顕わされていることにもおもいしられる。忍は耐える力である。だから仏道としても忍は寒暑にも耐え、苦楽にも煩わされず、毀誉にも心を動かさない力の内部的集中である。その忍の名が無生法につけられたのは、無生法に安忍することが、仏道の忍を成就するからではないであろうか。とすれば無生法忍を得ることは、寒暑にも順応し苦楽にも善処し、毀誉のよいところをも了解することとなるのである。それは内部への集中という緊張をも緩和して身心柔軟ならしめるものとなるのであろう。その無生法忍は、人間の生活を捨てて、山林に静寂をたのしむ賢者のそれではない。それで特に菩薩の無生法忍と願われたのであった。

### 三

しかるに真宗では「大涅槃を超証することとは、「来生の開覚」と期せられている。それは浄土へ往生することの他に無生を証する道がないということである。したがって往生というのは浄土を思慕しての「凡夫の情」であって、その実は無生である。これを「無生の生」という。しかれば無生法忍を得るといふことは、浄土往生に定まれる身の現生の利益

といわねばならない。われらは往生浄土を願うことにおいて現生に無生法忍を得るのである。

ここには無生の智慧と、往生の感情との融和がある。人生の業苦を痛感するものにとりては、往生浄土の願いは自然の情である。されどその感情を知識化すれば、凡夫の迷想にほかならぬものとなるであろう。その感情を純粹であらしめるものは、無生法忍である。したがって無生法忍も浄土を願うところにおいて支持せられるのである。もし浄土往生を否認して、無生法忍にとどまろうとすれば、それは、人間生活から遊離したものとなるであろう。ここにふたたび「菩薩の無生法忍」といわれた意味がおもいあわされる。菩薩とは、人間生活を離れては、仏道を求むるものであるからである。

思うに仏教は生死を問題とするものであるにちがいはない。されどその応答には二つの道が考えられるようである。一つは生死を即今の問題としてその解脱を求むるものである。禅に代表されている聖道はこの道をとるものである。一つは生死を現生の問題として、その帰依を求むるものである。生のよるところ死に帰するところに解脱の境を求むるものである。それが浄土の教えというものである。そこには生死解脱は願われてはいるが、しかし凡夫としての人間にとりては不可能であるという自覚があるのである。

その生のよるところとして如来の本願を信じ、その死の帰するところとして浄土の往生を期するものである。それはまことに自然の感情といわねばならない。したがってその浄土はこの世と地続きではなく、その往生は現生と時間続きではない。そこからの光はこの世を照らすがゆえに彼岸のものである。それは無生であるから未来といわれる。それで無生の原語Ajataは、未来とも来生とも翻訳され

た(『梵和大辞典』)であろう。その未来はいうまでもなく三世に属するものではない。「生としてまき」に受くべき生なく、趣として更にいたるべき趣なき」ところに感ぜられる超越的未来である。

### 四

こうして無生法忍を得るものは、また「もろもろの深き総持を得る」のである。その総持とは少ない言葉で多くの義を摂めるものである。「よく種々の善法を持ちて散失せざらしめ、よく不善根をさへて生ぜざらしめる、これを陀羅尼といふ」(『大智度論』)、その陀羅尼は総持の原語である。それで格言・教訓・偈文等が陀羅尼といわれるのであろう。いまここに総持というは、その善き格言等が身につくことである。聞くべき経法は多く多いことを要するのであるが、それを念持するためには、特に手近かで深いものがなければならぬ。その総持の徳が仏名を聞くものに与えられるのである。

その総持の智慧を、特に「もろもろの深き」ものに規定せられた。しかれば深き総持に対して、浅き総持もあることであろうか。

ここに思いあわされるものは概念というものである。概念もまた総持であるにちがいはない。知識人は概念によりて多くの思想を総持しているのである。されど念仏者に願われているものは、そのような総持ではない。概念的・思想的には全く無能である者にも忘れられていない総持である。念仏すれば必ず思い出される善い言葉である。それが特に深き総持といわれる所以ではないであろうか。

ただ念仏に受容せられる思想のみが真実である。また如何なる思想も念仏に摂取されなければ真実とはならない。こうして念仏はもろもろの善き思想を総持するのである。



これによりて経にはまた、浄土の道場樹を吹く清風に妙法の音声あり、それを聞くものは「深法忍を得て不退転に住し、仏道を成るに至るまで耳根清徹して苦患にあわな」と説かれてある。これすなわち仏名を聞くものは浄土の清風を感じ妙法の音声を聞くものであるということである。ここで特に留意すべきは無生法忍を得るものは耳根清徹するということである。その耳根清徹とは、いわゆる耳順ということの徹底せるものであろう。それは能く人言を了解するから、美言に惑わず妄語に逆らわないものである。したがって、その境地に達すれば、全ては、善意に受容せられるから、苦患にあうことはないであろう。無生法忍を得たるもののようにこびである。

しかるに経ではさらにその道場樹の「色をみる目も、音をきく耳も、香を知る鼻も、味を嘗める舌も光に触れる身も、法を縁する心も、みな甚深の法忍を得て不退転に住し、仏道を成るに至るまで六根清徹して、もろもろの悩患がない」と説いてあるこの経意を思うに、六根清徹ということも、耳根清徹を根本とするもののごとくである。これおそらく耳根の清徹しないものは、五感も六識も不透明であるということであろう。生来、聴覚の遅鈍であった身を顧みて思い当ることが多い。それだけ仏名を聞くものは、耳根清徹の利益をいただくありがたさを感じしめられることである。

その無生法忍による六根清徹とは、すなわち身心柔軟である。したがって「苦患にあわな」ということは身心安楽ということであろう。それで『大経』の身心柔軟を『如来会』では身心安楽と説かれたのであった。われらはあらためてその経意をいただかねばならぬ。

まるっと分かる！

## 仏教の日本史

『歴史道』Vol.135

日本の仏教1500年史

### 根本分裂から生まれた宗派 日本では独自に進化し分派した

仏教の開祖、釈迦が在世していた頃、仏教には宗派は存在していなかった。釈迦自身が教えを説いていたのだから異説が出る余地はなく、教壇は同じ教えを信奉する一つの集団であった。

しかし、釈迦が世を去り、時間が経つと、教えが口伝で受け継がれていたこともあって、異説が出るようになった。また、釈迦の教えのうちの何を重視するかによっても意見の相違が生じた。とくに戒律の解釈では対立が深く、厳しく守るべきとする上座部と、寛容的に用いるべきとする大衆部に分裂することになった。これを根本分裂といい、仏教の宗派はここより始まるということができる。

その後、教団は数多くの部派(200くらいあったと伝わる)に分裂し、さらに在家信者を中心として大乘仏教を称するグループが形成された。日本には主にこの大乘仏教系の教えが伝えられた。

中国ではインドでの仏教史とは関係なく、さまざまな経典が混在した形で伝えられたため、それら内容をよって分類し、釈迦の生涯のどの段階で説かれたものか推定するということが行なわれた。そして、どの経典に説かれた教えがもっとも重要な教えなのかを探求された。ここから『涅槃経』を

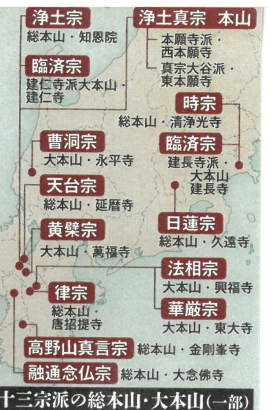
重視する涅槃宗、『華嚴経』を重視する華嚴宗、『法華経』を重視する天台宗といった宗派が成立した。日本の仏教も、こうした考え方を受け継いでいる。日本では宗派が成立するのは奈良時代に入ってからのことだ。三論宗・成実宗・法相宗・俱舍宗・華嚴宗・律宗の6つで、これを南都六宗(南都は平城京の意)という。

ただし、これらの宗派は今の宗派とは異なり、学派あるいは学部に近いものであった。そのため複数の宗派で学ぶこともできたし、一つの寺院に複数の宗派が存在することもあった。たとえば、東大寺は華嚴宗の寺院でありながら他の5宗派も整備されていた。

他の宗派との兼修を認めない現代の宗派に近い形になるのは、平安初期の天台宗・真言宗の成立以降のことになる。

この天台宗からは天台寺門宗・天台真盛宗が分派しているが、浄土宗・浄土真宗・日蓮宗・臨済宗・曹洞宗といった鎌倉新仏教の祖師たちが天台宗の総本山である延暦寺で学んだということも重要である。また、真言宗からも新義真言宗が分派し、さらにこれから智山派と豊山派が分かれている。

臨済宗は栄西が開祖といわれることが多いが、宗派によつて開祖は異なり、建長寺派は蘭溪道隆、南禅寺派は無関普門である。また、江戸時代には隠元が来日して臨済宗系の黄檗宗を開いた。



浄土真宗は戦国時代まで一派であったが、その勢力を恐れた天下人の政治工作により大きく二派に分裂した。

# 念仏と業道・念仏と行善

『歎異抄講話』瓜生津隆雄師著

## 念仏と行善

次に「念仏と行善」とは「念仏はまことに浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもつて存知せざるなり」「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしとよきひとの仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」と述べられた一段の意趣を指すのであります。

ここに念仏の「浄土のたね」「地獄の業」と主張する考え方を打破して「浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもつて存知せざるなり」と言われているのは、当時における一般的通念として地獄、極楽とは勧善懲悪のためで、善いことをすれば極楽へ行く、悪いことをすれば地獄に堕ちる、これは悪に傾く人を教えて善を積ましめる方便のために地獄、極楽を説くのであるという考え方がありました。言葉を換えると、念仏の信仰を、道徳のお手伝いをするもののように考える考え方であります。もちろん、善悪応報は仏法の説くところでもあります。しかしそれは惑業の因果として多く説かれる真理であります。いま「本願の念仏」は、かかる惑業の因果を超えた、如来の因果において成就せられた法である。されば、その如来の法は勧善懲悪の因果の枠で律すべきものでない。「地獄におつべき業」「極楽に生まるるたね」と沙汰して、如来の大悲

を忘れて惑業の因果の枠に引き降ろす沙汰は念仏道に対する越権の沙汰であつて、この親鸞のあずかり知らざるところである。念仏の道は如来の因果として聞き習ったところのものである。かえつて念仏を万善万行の総体として廃悪修善の定散心（自力心）の手で握るところに念仏の意義を誤る過失を招く。このことわりを明断せられたものが「浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもつて存知せざるなり」というお言葉でないでしょうか。道徳的業道の因果の心をもつて超因果の念仏をとらえてはならぬことを教えられているようであります。

## 念仏と業道

「たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。その故は、自余の行もはげみて仏になるべかりける身が、念仏をまうして地獄にもおちてきふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もきふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」とある法語の精神は「いづれの行もおよびがたき身」の上に行なわれる「念仏」というものを明らかにせられたようであります。

いったい親鸞聖人が「いづれの行もおよびがたき身」と言われた反省には如何なる思想が働いているのでしょうか。窃かに思うに、そこに宿業感というものがあられると思われまふ。宗祖の宿業感を明らかにするには、仏教にいう（一）異熟宿業と（二）業宿業といふことを考慮に入れるべきであります。異熟宿業とは異熟の果として受けたこの身はどうにもならぬということであり、（二）業宿業とは異熟の身

には制約せられた、行為に自由にならぬ三業があるということでもあります。されば異熟宿業にせよ、業宿業にせよ、ともに決定的な、思いにまかせぬ不自由な制約を受けている心身であることを指すのであります。すなわち賢善精進の姿を示して精進の行をやつてみてもそれは異熟宿業・業宿業の身心にとつてはどうにもならぬものがある。それを「いづれの行もおよびがたき身」という体感としてあらわされたものでありましよう。この語はまた「愚身の信心」と言われた「愚身」とか「そくばくの業をもちける身」と言われた「身」にも通ずる考えであります。「身」とは異熟の果体であります。

かくて、「自余の行をはげみて仏になるべかりける身」でなく「いづれの行もおよびがたき身」たる親鸞聖人は、それを宿業と感じ、その身を解脱せしむる道が「念仏」であつて、それを「念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし」とよき人（法然聖人）のおほせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」と的示せられたものでありましよう。ここに聖人の信味が躍如としています。

思うに「ただ念仏して」の「ただ」の二字を、従来多く、念仏に係わる副詞のごとく読まれています。静かにこの第二章を見ると「ただ」という副詞は、後の「信ずる」にかかるようであります。さればこのお言葉は唯信念仏―「念仏をただ信ずる」―念仏往生の教えをただ信ずるほかに別の子細なき意味を表明せられたものとうかがえます。されば聖人の道は「念仏をただ信ずる」この念仏の一道よりほかに往生の道もなく、法門の要もなかったものであります。極楽で助かるのでなく、それより更に適切な「念仏の救い」―念仏に遇える身―これが関東の同行に対して示された聖人の全信念であつたのでありましよう。



## 13宗派だけが重要な宗派というわけではない

日本の宗派を説明する時に「13宗56派」といわれることが多い。この数は戦前に公認された宗派の数に基づく。しかし、1939年に宗教団体法が成立した際には28宗派が公認団体となっていた。

そもそも13は中国の宗派数を示すものとして使われた数で、戦前の宗派数はこれに合わせた可能性があり、性格に実体を示すものではない。戦後も「清水の舞台」で知られる清水寺が北法相宗として法相宗から独立するなどしており、宗派数の変動は続いている。

しかし、寺院数・檀信徒数が多い宗派をあげると概ね13となることから、13宗派として説明することは、今も一般化している。本稿もこれに随うが、北法相宗のように、13宗派に含まれなくても重要な宗派は少なくない。

さて、日本仏教の13宗派は、奈良仏教系・天台系・真言系・浄土系・日蓮系・禅宗系に分類できる。奈良仏教系は南都六宗時代から続くもので、法相宗・華嚴宗・律宗がある。学問仏教の性格が強く法相宗は心のあり方を考究する唯識、華嚴宗は『華嚴経』の教え、律宗は戒律を教理の根幹とする律宗と名前がよく似ている宗派に真言律宗がある。やはり戒律を重視する教義をもつが、真言宗系の宗派だ。

天台宗は『法華経』を根本聖典とする中国の天台宗を起源とするが、最澄に始まる日本の天台宗は禅・戒律・密教などの教えを含み、とくに密教の比重が大きい。分派した天台寺門宗も同様であるが天台真盛宗は浄土信仰の要素が濃い。

真言宗は開祖の空海が唐で継承した純粋密教（真言密教）に基づく宗派であるが、奥義は師から弟子に直伝されるという密教の性質から、多くの分派が生じている。

浄土系は阿彌陀如来を信仰対象とし、極楽往生の実現を目指す宗派といえる。阿彌陀（浄土）信仰そのものは飛鳥時代よりあるが、法然は念仏を唱えることによって往生できることを教えの根幹とし、専修念仏を説いた。これが浄土宗で、その教えから浄土真宗・時宗が出た。融通念仏宗はその先駆的宗派といえる。なお、浄土真宗は徹底した他力本願の教え、時宗は踊り念仏を特徴とする。

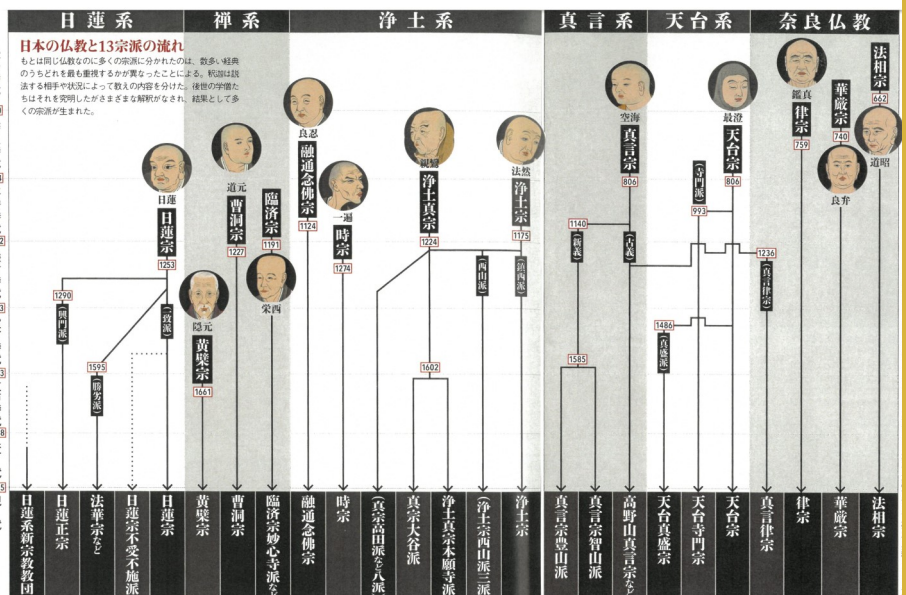
日蓮は天台宗の『法華経』信仰を深化して日蓮宗を開宗した。題目（南無妙法蓮華経）を重視するところに特徴がある。日蓮正宗・顕本法華宗など、分派が多い。

禅宗は6世紀の初め頃にインドから中国にやって来た菩提達磨（達磨大師）を開祖とする宗派で、経典に書かれていることよりも修行の中で悟りを得ることを重視する。中国で発展し、日本には臨済宗と曹洞宗が伝えられた。江戸時代に伝えられた黄檗宗も臨済宗の一派であるが、伽藍や仏像、儀礼が明時代の中国風なので、従来の

従来の禅宗とは異なる印象を受け

| 宗派    | 宗祖 | 本山   | 本尊      | 経典           | 宗門・寺院数 | 檀信徒       | 特徴                                        |
|-------|----|------|---------|--------------|--------|-----------|-------------------------------------------|
| 法相宗   | 道昭 | 興福寺  | 釈迦如来    | 『成唯識論』『解深密経』 | なし     | 56万4322人  | 東大寺の心願堂が、この宗派の中心で、多くの僧侶が修行している。           |
| 華嚴宗   | 良弁 | 東大寺  | 盧舎那仏    | 『華嚴経』        | なし     | 不明        | 東大寺の心願堂が、この宗派の中心で、多くの僧侶が修行している。           |
| 律宗    | 鑑真 | 唐招提寺 | 盧舎那仏    | 『四分律』        | なし     | 2万3800人   | 戒律を重視する宗派。東大寺の心願堂が、この宗派の中心で、多くの僧侶が修行している。 |
| 天台宗   | 最澄 | 延暦寺  | 釈迦如来    | 『法華経』        | なし     | 176万2238人 | 天台宗の本山。多くの僧侶が修行している。                      |
| 真言宗   | 空海 | 金剛峯寺 | 大日如来    | 『大日経』『金剛頂経』  | なし     | 不明        | 密教の中心。多くの僧侶が修行している。                       |
| 融通念佛宗 | 良忍 | 大念佛寺 | 十一尊天得如来 | 『浄土三部経』      | なし     | 10万600人   | 浄土宗の前身。多くの僧侶が修行している。                      |
| 浄土宗   | 法然 | 知恩院  | 阿彌陀如来   | 『浄土三部経』      | なし     | 630万5113人 | 浄土宗の本山。多くの僧侶が修行している。                      |

| 宗派   | 宗祖 | 本山   | 本尊    | 経典      | 宗門・寺院数 | 檀信徒     | 特徴                   |
|------|----|------|-------|---------|--------|---------|----------------------|
| 浄土真宗 | 親鸞 | 西本願寺 | 阿彌陀如来 | 『浄土三部経』 | なし     | 2万352人  | 浄土宗の前身。多くの僧侶が修行している。 |
| 時宗   | 一遍 | 清浄光寺 | 阿彌陀如来 | 『浄土三部経』 | なし     | 8万1870人 | 浄土宗の前身。多くの僧侶が修行している。 |
| 臨済宗  | 栄西 | 建仁寺  | 釈迦如来  | 『法華経』   | なし     | 5654人   | 禅宗の前身。多くの僧侶が修行している。  |
| 曹洞宗  | 道元 | 永平寺  | 釈迦如来  | 『法華経』   | なし     | 1万4470人 | 禅宗の前身。多くの僧侶が修行している。  |
| 日蓮宗  | 日蓮 | 久遠寺  | 釈迦如来  | 『法華経』   | なし     | 4653人   | 禅宗の前身。多くの僧侶が修行している。  |
| 黄檗宗  | 隠元 | 萬福寺  | 釈迦如来  | 『法華経』   | なし     | 449人    | 禅宗の前身。多くの僧侶が修行している。  |





# 稱讃寺十二月行事予定

## 東組実践運動推進僧侶研修会にて

## 編集後記（愚案）

一六日（月）午後二時  
のんのん法話会

親鸞聖人の報恩講をお迎えするにあたり、ご一緒に、お供え物の準備をしませんか。

二三日（日）十二時半より

一二・三〇 お斎

一三・〇〇 法要

一四・〇〇 法話（住職予定）

一五・〇〇 茶話会

一六・〇〇 終了

晦日のお忙しい時期かと存じますが、当来を望む望念会にしましょう。

としく  
あ暮れ

なげ

にちじょう

何気ない 日常にこそ

しあわ

幸せがある

二〇二四年「心のともしび」十二月カレンダーより

去る十二月三日、築地本願寺にて、小池秀章氏の講義を聴聞いたしました。

小池氏は、山口教区のご寺院の出身で、現在、龍谷大学並びに京都女子大学の非常勤講師をつとめておられます。九年前まで京都女子大学付属の女子校で教鞭をとられていたので、わかりやすくお話しされ、講義調の法話に心がけているとのことでした。また、小池氏は、現在、『本願寺新報』に「正信偈」に学ぶを連載中であり、今回、そのテーマで講義いただきました。

今回は、「正信偈」の概略的なお話になりましたが、冒頭で「仏教を学ぶ」ということは、①仏道をなろうといふは自己をならふなり。（道元『正法眼蔵』）②経教はこれを喩ふるに鏡のごとし。しばしば読みしばしば尋ねれば、智慧を開発す。（善道『観経疏』）から「**仏教を学ぶ**」とは「**仏教に学ぶ**」ということであり、「**正信偈を学ぶ**」とは「**正信偈に学ぶ**」ことと捉えてのことでした。「今朝、鏡を見てどうでしたか」と尋ねると、誰もが鏡の形色を応えず、鏡に映った自分の姿を応えます。「を」だと知識が強調されるとのこと。「智慧・慈悲」は「光」に例えられます。「光に遇う、触れる」とは、「光」が「教えの言葉」だということ。（聞光力）

また、学生に「悟る」とは「真実」、「迷い」とは「煩惱」の話をしたら、「悟りたいと思うことは、煩惱ですか」と尋ねられたそうです。私には思いも付かない問いで、一瞬、考え込んでしまいました。

「学仏大悲心」も「仏の**大悲心に学ぶ**」ということになるのでしょうか。仏さまの**大慈悲に照らされた私**を知らされるのでしょうか。

『「自然」といふは、「自」はおのづからといふ、行者のはからひにあらず、「然」といふは、しからしむといふことばなり。しからしむといふは、行者のはからひにあらず、如来のちかひにてあるがゆゑに法爾といふ。「法爾」といふは、この如来の御ちかひなるがゆゑに、およそ行者のはからひのなきをもつて、この法の徳のゆゑにしからしむといふなり。すべて、ひとのはじめてはからはざるなり。このゆゑに、義なきを義とすとしるべしとなり。』

『親鸞聖人御消息』『自然法爾の事』『註釈版聖典』七六八頁より抜粋

「さようなら」という言葉は、別れの言葉としての認識が強いのですが、語源は、「さうであるならば」「さようであるならば」が縮んで「さならば」となって、それが「さようなら」という別れの言葉となったそうです。つまり、過去を踏まえて現在を総括することによって、そこに未来へのつながりを含意させているのだそうです。それとはポイントの置き所が少し違って、「さうならなければならぬならば」と何かしら不可避の定め、巡り合わせのようなものを想定しての、未来にそうなることを受容しての別れの言葉として「さようなら」と表現しているとも捉えられています。

そこに、阿弥陀さまからの「仏に成っていくのですよ」との「自然法爾」のはたらきに出遇えて、素直に頷いている様子があるような気がします。

（『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』を読んで）